


(シラバス No.4) (基盤科目)

科目名	研究法特別演習Ⅳ 英語名: Special Seminar on Study Method Ⅳ	必修/選択	選択必修	
		単位数	2 単位	
		担当教員	三田地 真実	

【授業概要】

本演習においては、いずれも「時間を捨象しない」研究方法である、行動分析学の一事例実験計画法及び質的研究法として複線経路・等至性アプローチを取り上げ、教育実践研究において主に「プロセス」を扱う研究方法とはいかなるものであるかを学修する。

量的研究と質的研究のそれぞれの特長を理解した上で、それぞれの利点を活かす研究の在り方、及びこの二つを統合した混合法について教育実践研究の視点から考察する。特に、教育実践研究の場合には、教育の目的と方法（教育を受ける側の利得に関わる部分）、実施したその方法の効果の測定（方法の妥当性という部分）という二段階で考えなければならない。このことを明確に理解し、自らの教育実践研究の進め方について自らの現場に照らし合わせた研究計画を立案すべく、その中核となる研究方法を選択し、研究を設計できるようになることを狙いとする。

【キーワード】

単一事例実験計画法（Single Case Design）、複線経路・等至性アプローチ（TEA, Trajectory Equifinality Approach）、時間、混合法（Mixed Method）

【授業の到達目標】

- ・行動分析学の基本概念・技法を理解した上で、研究目的に応じた単一事例実験計画法をデザインすることができる。
- ・デザインした単一事例実験計画法を実施し、研究としてまとめることができる。
- ・複線経路・等至性アプローチの理論と手続きを理解した上で、研究目的に応じた TEA の研究計画をデザインすることができる。
- ・デザインした TEA の研究計画を実施し、研究としてまとめることができる。
- ・時間を捨象しない量的研究と質的研究の混合法の現場への応用を臨床家の視点から考察することができる。

【スクーリング実施の有無】

スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】

【授業計画】

回	内 容
1	オリエンテーション 本演習のねらい・進め方
2	教育実践における研究とは何か（理論と実践の往還の意味・意義について）
3	時間を捨象しない研究方法と教育実践研究の関連性（先行研究からの示唆を得る）
4	行動分析学の哲学・理論に基づいた、単一事例実験計画法の概要
5	単一事例実験計画法（1）（AB デザイン、反転デザイン）
6	単一事例実験計画法（2）（多層ベースラインデザイン）
7	単一事例実験計画法（3）（基準変更デザイン、操作交代デザイン）
8	質的研究法の基本的な考え方と複線経路・等至性アプローチの位置付け
9	TEA におけるリサーチクエッションの立て方
10	TEA におけるインタビューの手続き（対象選定とトランスビュー）
11	TEM 図の描き方（等至点・分岐点・社会的ガイド、社会的助勢について）
12	自らの教育現場への単一事例実験計画法、複線経路・等至性アプローチの適用（1）（研究の設計）
13	自らの教育現場への単一事例実験計画法、複線経路・等至性アプローチの適用（2）（実践と省察）
14	混合法で行う教育実践研究の利点と欠点の整理
15	まとめと今後の課題の検討

試験

【履修にあたっての準備・履修上の注意点】

- ・行動分析学の基礎については、習得していることを前提とする。
(行動分析学の基本用語を全く学習していない場合は、受講をご遠慮ください)
- ・質的研究の基礎については、習得していることを前提とする。
- ・量的研究の基礎については、習得していることを前提とする。

【スクーリングでの学修内容】

スクーリングは、学修の初期に、授業の目的や学修の概要を知り、この科目を通じて何をめざすかを学生と教員が相互に確認するために行う。さらに、学修の終期に、学修のまとめとしてもスクーリングを行う。

学修の初期のスクーリングに関しては、スクーリング前には、行動分析学の基本概念、単一事例実験計画法の基本概念、質的研究の基本概念、複線経路・等至性アプローチの基本概念については事前に学習をしておき、スクーリングでは特に教育実践研究にどのように活用できるのかについて議論を通して理解を深める。スクーリング後には、自分の現場で単一事例実験計画法、複線経路・等至性アプローチを使った研究計画を立案する。

学修の終期のスクーリングでは、スクーリング前には自らの現場で単一事例実験計画法、複線経路・等至性アプローチを用いた予備研究を実施し課題を抽出し、再計画を立案しておく。スクーリングでは、再計画した、実践可能な単一事例実験計画法、複線経路・等至性アプローチの問題点や実施上の困難点の解決のためには具体的にどのような手立てが必要かについて、様々な文献から省察し、自らの計画を本実験として実行可能なものに修正する。スクーリング後には、実際にそれぞれの研究方法を実践し、省察する。

スクーリングはこの2つの時期を含み、合計4コマ6時間以上をめぐり行う。

【評価方法】

合否については、研究計画・方法に関するプレゼンテーション・レポート(50%)、科目修得試験(50%)で評価する。

【テキスト】

- ・ハーセン&バーロー(1997)『一事例の実験デザイン—ケーススタディーの基礎と応用—』(二瓶社)
- ・安田裕子&サトウタツヤ(2017)『TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する—』(誠信書房)

【参考図書】

- ・Kennedy, C. H. (2004). Single-Case Designs for Educational Research, Allyn & Bacon
- ・Sato, T. (2017). Collected Papers on Trajectory Equifinality Approach, Chitose Press
- ・坂上貴之・井上雅彦『行動分析学』有斐閣アルマ、2018年
- ・メイザー『メイザーの学習と行動(日本語版第3版)』二瓶社、2008年
- ・サトウタツヤ(編著)(2009)『TEMではじめる質的研究』(誠信書房)
- ・安田裕子&サトウタツヤ(編著)(2012)『TEMでわかる人生の岐路』(誠信書房)
- ・安田裕子他(編著)『TEA理論編—複線経路等至性アプローチの基礎を学ぶ—』新曜社、2015年
- ・安田裕子他(編著)『TEA実践編—複線経路等至性アプローチを活用する—』新曜社、2015年

【教員メッセージ】

本授業では相当な分量の文献講読(含む英語)、及びSCでは他の学生との対話を行います。

【備考】

特記事項なし